

学会発足の頃

(’71年3月～’80年5月 学会大会1回～9回)

初代理事長 江橋 慎四郎

レクリエーション学会の発足は、昭和46年3月である。それ以前は、研究会として関係者の努力によって研究のつみあげがなされてきたが、研究会の発足後7年目にして、学会の結成をみるに至った。

会員数も約200名余となり、体育学関係者以外の造園学、観光学、家政学、社会学、教育学等の学問領域の研究者も会員として加入していた。しかし、最大の悩みは、レジャー・レクリエーション研究を専門とする研究者の少いこと、すなわち、他の学問領域に籍をおきながらレクリエーション学会員となっている人々が多く、如何にして、レジャー・レクリエーション研究を専門とする研究者を育て、獲得してゆくかが一つの課題であった。

初代の会長は、前川峯雄氏、筆者が理事長ということになったが、学会発足早々の最低限の目標は、会員の研究の場を確保することであり、学会機関紙の発行と、定例研究会の開催として、年1回の学会大会の開催ということであった。また、庶務担当理事には、イリノイ大学の大学院でレクリエーションの専攻をされてきた池田勝氏（現大阪体育大学教授）にお願いし、アメリカでの経験を生かし学会活動の活発化をはかることとした。発足早々の学会が、遅々とした歩みではあるが発展をはかり得たのは、池田氏の企画力、行動力、実行力におうところが大きい。

学会大会の開催については、全国レクリエーション大会と同時に、大会の開催地で開くことにした。アメリカでも、アメリカのレジャー・レクリエーション学会の研究発表大会は、全米レクリエーション公園大会と平行して開催されており、私自身、レクリエーション研究者は、現場、実際の活動の理解を深めることは必須のことであると考え、かつ、レク大会と同時に開催すれば、開催地は事前に分り、会場選定の心配はなく、学会大会開催には、好都合であると考えたからである。

しかし、レク大会との平行開催には、異論がなかった訳ではなく、学会の独自性が失われるという意見もあった。私自身は、レク大会と同時にレク学会大会を開催しても、何等学会の独自性は失われることはなく、また、レク協会から学会に干渉がある訳ではなく、レク協、レク学会が共に大会をもつことによって、相互に補充し、研究者と実践家との相互理解を深め、日本のレクリエーション運動の発展に寄与し得ると考えたからである。現在は、両者は分離して開かれているようであるが、日本のレジャー・レクリエーション関係者の総意を結集する意味でも同時開催が望ましいと考えている。また、研究者は、現場、現実から学び得る機会も多いのではあるまいか。

学会発足早々といえどもやるべきことは多く、研究がすすめば、分化の方向が自然に生れてくる。専門分科会設置の動きもあらわれてきた。筆者は、レクリエーション学会とは至って、専門の研究者は少なく、いわば学際領域の研究者の混合世帯の一面のあることも否定できなかった。従って、専門分科会の設置は、急ぐべきではなく、10年位は、研究は多岐にわたっても、共通の土台の構築に力をそそぐべきではないかと考えていたが、会員の声には枕し難く、専門分科会設置の規程をつくることになってしまった。しかし、筆者は、今でも、レジャー・レクリエーション研究の核は何か、分化とともに統合の方向も大切ではないかと考えている。